

令和 7 年度

行政視察報告

遊佐町議会
文教産建常任委員会

1. 観察日程

7年10月6日（月）～8日（水）

2. 参加議員

| | | |
|-----------|-----------|--------|
| 文教産建常任委員会 | 委員長 | 伊原 ひとみ |
| | 副委員長 | 駒井 江美子 |
| | 委 員 | 高橋 冠治 |
| | 委 員 | 菅原 和幸 |
| | 委 員 | 那須 正幸 |
| | 委 員 | 本間 知広 |
| | 議会事務局（随行） | |
| | 係 長 | 船越 早苗 |

3. 遊佐町議会規則第74条による派遣について

| | |
|--------------|---------|
| 議長に対する派遣承認要求 | 7年9月11日 |
| 議長の承認 | 7年9月11日 |

4. 観察地及び観察事項の概要

（1）島根県邑智郡（おおちぐん）美郷町　鳥獣被害対策の取り組みについて

平成11年からイノシシの被害対策に先進的に取り組み、鳥獣被害対策を手段として町おこしにつなげている。農作物が被害を受ける夏のイノシシを農家が自ら捕獲する仕組みを作る。捕獲した後、解体、食肉に加工する施設を整備し、食肉を学校給食や町内のお店に提供。現在は、電気柵のメーカーが町内に支社を設置。また大学とも提携し、鳥獣被害対策のノウハウが集まる場所となっている。これまでの取り組みとともに、イノシシの行動、捕獲するために必要な対策の研修を行った。

（2）島根県大田市（おおだし）　石見銀山大田ひと・まちづくり事業協同組合

特定地域づくり事業協同組合制度の取り組みについて

総務省の制度である特定地域づくり事業協同組合制度を2年前から活用して事業者と市内外を含む若者とをマッチングして事業者の人手不足と若者の夢の実現を応援している。事業の概要と、大森町での取り組みについて研修を行った。

（3）島根県大田市　石見銀山を資源とした産業と教育の取り組みについて

世界遺産に登録されている石見銀山を活用してどのように産業や教育に活か

しているのか観光面を中心に研修を行った。

(1) 島根県邑智郡美郷町 鳥獣被害対策の取り組みについて

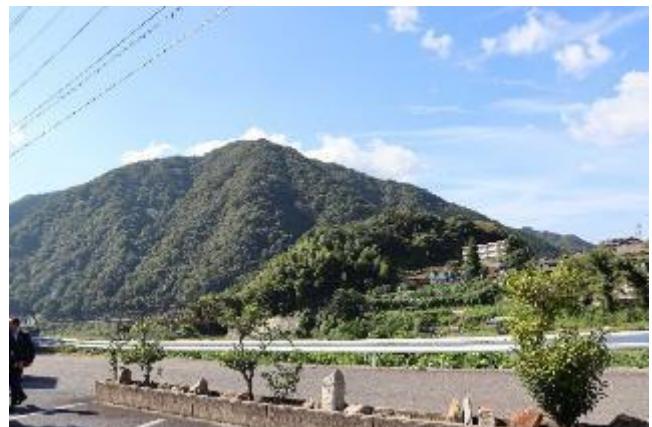
視察日時 7年10月6日（月） 14:00～16:00

場所 美郷町役場 会議室

説明者 美郷バレー課 課長 安田 亮氏

□美郷町の概要

島根県のほぼ中央部に位置し、山間地にある町。その南北を中国地方最大の川、江の川（ごうのかわ）が貫流している。面積は 282.92 km²で居住可能地域は、31.39 km²で総面積の 1.1%。大半は山林となっている。平成 16 年（2004 年）に同じ郡内の邑智町と大和村が合併して誕生した。温泉が多く、江の川でのカヌー、伝統文化が魅力の町となっている。平成 30 年に町内を通っていた鉄道が廃線となっている。



町の様子

美郷町の位置（美郷町観光協会より）

*鳥獣被害対策の取り組みについて

(1) 概要

平成 11 年から鳥獣被害対策に説明者の安田課長が取り組んできた。鳥獣被害対策をまちづくりの手段として位置づけ、仕組みづくりから始めた。農作物に被害を与える夏のイノシシを捕獲、その捕獲したイノシシを利用するための施設整備、町内外の人を巻き込み事業をぶれずに進めてきた。処理したイノシシ肉や皮は、「おおち山くじら」としてブランド化。食肉は、学校給食や、町内の飲食店に提供。皮革は、町外の業者になめしてもらった後、地域の手仕事好きなお母さんたちが小物を作り、町内でのみ販売している。麻生大学のフィールドワークセンターの開設や、美郷バレー協定企業が美郷町に進出するなど、

鳥獣被害に関する知が集積する場所となりつつある。

(2) 観察説明から

○取り組みの根底にあるもの

動物は、昔も今も変わらない。変わり続けるのは人間社会。現場に答えがある。住民たちが動かないと無理。

鳥獣と人間との闘いではなく、過疎・人口減少の波との闘いであるという考え方、また補助金に頼らず、身の丈にあったやり方でまちづくりを自らが行っていくという姿勢で取り組んできた。

○平成 11 年からの取り組み、獣害対策の抜本的改革

説明者である安田氏が産業課へ異動して、獣害対策に取り組み始めたことがきっかけで対策の現状と課題を把握し、抜本的改革が始まった。

美郷町は、昔からイノシシがいるところで、秋から冬の脂がのったイノシシ猟を行うため、町内外のハンターがやってきていた。農作物の被害がある夏にイノシシを駆除することは、冬に捕る分が減ることになると受け止めをする人もいた。そのため、農家の被害対策の要望と駆除を担当する猟友会の利害が対立するのが課題だと認識。対立を解消するため、被害対策（捕獲）と狩猟の線引きを行い、農家に狩猟免許を取得してもらい、自ら罠をしあけ捕獲してもらう取り組みを始める。元祖狩りガールが誕生。

また、イノシシ捕獲後の奨励金支払いは、尻尾で確認していた。しかし、冬毛の尻尾が季節外れの時期に提出されることもあったため、現地での確認に変更。



観察説明の様子

○夏イノシシの資源活用、ブランド化へ

H11 年～16 年に独立行政法人近畿中国四国農業研究センター（現：農業機構西日本農業研究センター）に捕獲した夏イノシシの肉を送り分析をしてもらった。その結果、夏のイノシシも冬のイノシシの肉質と同じであるという結果が出た。

夏場のイノシシを食肉、ペットフード、皮革など余すことなく活用した。

ただ、イノシシ肉は、臭くてまずいなどのイメージがあるため、お祭りなどのときにイノシシ肉のお鍋を出したり、平成17年には学校給食で30回（うち6回はシカ肉）ほど提供するなど、イメージを変えるすりこみのための活動を行った。

「おおち山くじら」としてブランドを確立していった。

○閉園した保育園を食肉加工設備に

農家が捕獲したイノシシの処分負担を軽減するため、閉園した保育園を食肉加工施設へと整備した。町内の飲食店や学校給食へ提供している。



現在、町内の2店舗でイノシシ肉を食べることができる。

社会福祉法人が運営する「そら豆」でイノシシ肉 100%のハンバーグ定食をお昼にいただいた。くせも臭みもなかった。臭みに関しては、隠し味で消しているという話だった。

イノシシハンバーグ定食

○住民をさらに巻き込む

農家の女性たちに狩猟免許を取得するだけでなく、地域活動に積極的に参加してもらった。その1つが、イノシシ、シカの皮革を使った小物づくり。町外の業者に皮をなめしてもらい、手仕事の好きな女性たちが、毎週1回集まって小物を作っている。かつて養蚕業が盛んで、縫製工場があったこともある町の強みをもう一度活かしてもらっている。お母さんたちが直接販売。インターネットで販売すればという声もあるが、女性たちの楽しみで行っているものなので、彼女たちのペースが守られるよう配慮している。



農家女性たちの手仕事の楽しみ 皮革の小物作品

○美郷バレー構想

これまでの取り組みで町内外とのつながりや、情報が美郷町に集まってくることが多くなったこともあり、産・官・学・民が連携し、さらに知や人が集積する場所を目指そうと美郷バレー構想が始まった。美郷バレー構想は、アメリカのシリコンバレーの超獣害版を目指すというもの。想いが同じ組織や団体と協定を結んでいる。お互いにメリットのある形のあるWIN-WINの関係を目指している。「学」としては、麻生大学のフィールドワークセンターが開設され、大学生が定期的に町にやってくるようになった。

また、「民」としては、電気柵メーカーのタイガー株式会社が、美郷バレー中国営業所を開設している。麻布大学で学んだ学生や、美郷町で地域おこし協力隊として任期終了後の受け皿となっている。ほかにも古川電工、JR西日本なども構想に参加している。



美郷バレー構想（説明資料より）

○苦労した点

獣友会の既得権益の部分を改革しようとしたので、理解を得るのが大変だった。

組織内、上司からの理解が得られないことが多く、始めたころは、仕事としてではなく、住民活動として行っていた。内発的口コミ、農家の人たちからの信頼を得たこと、町長が変わったことにより、現在は美郷バレー課という独立した課で事業を行っている。

○具体的な獣害対策

正しい情報と実践が基本。

- ・ワナにかかるない

守りが徹底されていないため。美郷町では、ハコワナを使っている。ただ、エサがある場所が守られていない状況で、ハコワナにエサを置いても効果はない。

適正な電気柵のセットと草刈りなどの維持管理が必要。柵は、地上から20センチの高さに設置する。それ以上の高さに設置すると、下を潜ってくぐり抜けてしまう。

イノシシだけでなく、シカも極力飛ばずに、下を潜り抜ける習性がある。

- ・電気柵が有効

やはり対策としては、電気柵が有効。

電源として、8万円くらいするがソーラーパネルが効率的。

- ・ワイヤーメッシュは10cm目のものがいい。ホームセンターなどで売られているものは、中に入っている鋼が少なく弱いものもあるので注意。

- ・臭みを消す方法

血抜きを徹底すること。それが上手く行かないと臭みが残る。仕留めたその場で川の水などで洗う、などの方法ではうまくいかない。美郷町では生きたまま、処理施設に運びそこで血抜きを行っている。

- ・イノシシの習性

学習能力が高い。雑食性だが、ミミズは、食べない。コールタールなどの忌避剤、光や音などは慣れてしまうので効かなくなる。

- ・クマの習性

食べ物への執着心が強い。

最近、柿を食べているが、嗜好性の強い食べ物で脂肪がないため体に脂がつかない。だから冬眠しなくなった。



説明者の安田氏と

～視察を終えて～

獣害対策を補助金に頼らず、身の丈に合った方法で、まちづくりの手段として取り組んできた経緯やノウハウを惜しみなく共有していただいた。獣害対策の点だけでなく、複眼的に物事を見て仕組みづくりをしてこられたとのことで頭が下がる。「地域づくり－補助金事業＝何が残っている」残っている物がその町の強みという言葉が印象的だった。

「必要があれば、行きます。」という力強い言葉までいただいた。また、協定を結んでいるタイガー株式会社が、仙台にも支所がある。電気柵の正しい設置方法などを指導してもらうようつなぐことも可能とのこと。獣害対策には、正しい知識と実践が必要なことがわかった。

(2) 島根県大田市 石見銀山大田ひと・まちづくり事業協同組合

視察日時 7年10月7日（火） 10：00～11：45

場所 井戸神社社務所

説明者 代表 松場 大吉氏

□大田市大森町の概要

大田市の一地区。中枢となる場所は、江戸時代に天領であり、石見銀山の鉱山町となっていた。銀山でにぎわっていた当時は、人口は20万人。銀が採れなくなり、大正時代に銀山は閉山。違う鉱物を採掘していたが、昭和18年の水害で坑道が埋ってしまった。明治期に大森村、その後大森町となった。その後大田市に編入している。面積は、10.13 km²で人口は380人。



大森町の町並みと地図

*石見銀山大田ひと・まちづくり事業協同組合について

(1) 概要

4年度に総務省の特定地域づくり事業協同組合制度を利用して、石見銀山大田ひと・まちづくり事業協同組合を立ち上げ、5年度から始動。地域全体の仕事を組み合わせて年間を通じた仕事を創出。

事業者8社、派遣スタッフ7名からスタートして、現在は事業者14社、派遣スタッフ11名となっている。

(2) 観察説明から

○ 制度の概要説明

特定地域づくり事業協同組合制度とは

事業者単位で見ると年間を通じた仕事がない、安定的な雇用環境、一定の給与水準を確保できないなどの地方の課題を支援するための総務省の制度。もともとは、離島対策だったが、それ以外でも利用できるようになった。

特定地域づくり事業協同組合で地域全体の仕事を組み合わせて年間を通じた仕事を創出し、組合で職員を雇用し事業者に派遣することが可能となる。いわば、地方版人材派遣会社。



(総務省 HP より)

・制度の仕組み

組合が労働者派遣事業等を行う場合、都道府県知事の認定を受け、届け出をすることで実施できる。

特定地域事業協同組合は、発起人が4者以上必要。組合員となるために出資をしてもら

う。組合員となった事業者が、利用料を支払い、その中から派遣職員に賃金を支払う。組合員は、利用する時給分だけ払えばよく、社保などは、協同組合が負担。

国・自治体からは、組合運営費の1/2の範囲内で支援がある。国が1/2、市町村1/2負担。



(総務省 HP より)

・注意点

地区外（市町村外）への派遣はできず、労働法派遣法に基づき、派遣できない業務があるなど気をつけなければいけない点がある。

○大森町で制度利用の経緯、お金に重点を置かない

生まれ育った大森町への愛着、産業がないという課題が活動の原点。心の豊かさを重視し、お金に重点を置かない活動を始めた。

説明者の松場氏は、石見銀山群言堂の代表を務めていた。（山形市にも支店あり）石見銀山群言堂は、昔ながらの生活文化を大切にしながら、暮らしを作るものと姿を残す商品を販売している。

その石見銀山群言堂と、義足メーカーの中村ブレイスが、大森町に本社を置き、まちづくりの中心的な役割を果たしている。昭和62年に国が大森町を町並み保存地区に選定したことも契機となった。行政に任せても進まないと自らまちづくりをしていくようになる。中村ブレイスは、1年に2、3軒のペースで家を買い取り、改修して貸し出すという取り組みを補助金など使わず続け、これまでに120軒ほどを改修した。

しかし、10年ほど前に保育園の園児が3名まで減り、市からの援助が打ち切られるところまで行ったが、上記2社の支援を行うなどして現在は25名が在園している。



群言堂本社

群言堂前身の Bura House



中村ブレイス本社

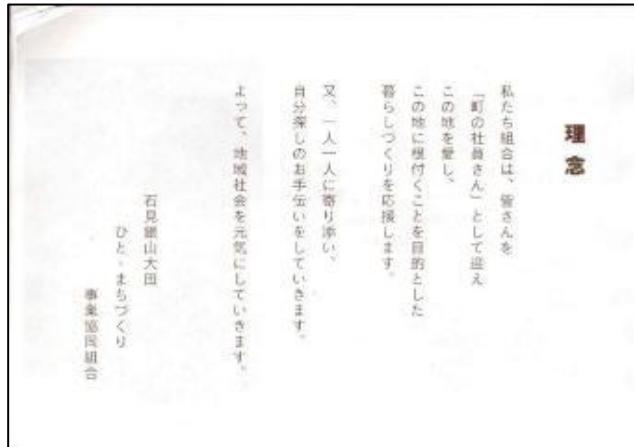
人口が減る今後を見据え、地域の担い手を確保すること、また若者の夢を応援するために大田市でも1つ特定地域づくり事業協同組合を作るという話があったとき、この制度は地方創生にとっては一丁目一番地の事業だと手を挙げた。

○事業協同組合スタート、運営方法

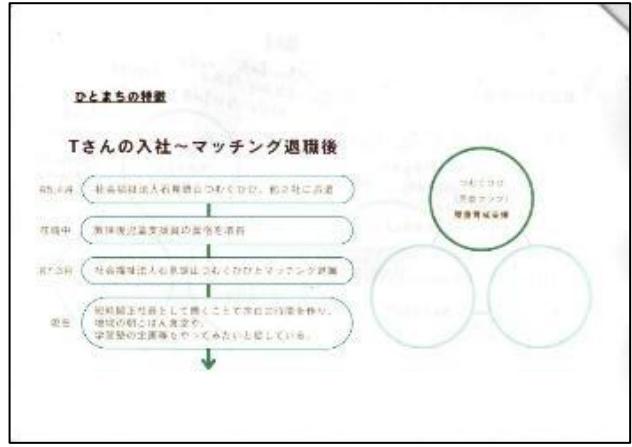
- ・R5年事業所8社、派遣スタッフ7名でスタート。

1年間で2社以上勤務するマルチワークをするため、派遣先となる事業者を増やすよ

うにしてきた。運営費の補助が国、県、市町村からあるため、運営費を増やすときは議会の承認が必要となる。



事業協同組合の理念（説明資料より）



派遣スタッフの働き方例（説明資料より）

・派遣スタッフの労働時間、待遇

法律を基準に週 40 時間、月 21 日でシフトを決めていく。面談をして、持っている資格や資質をみてどの事業者に派遣するかを采配している。面談は、2~3ヶ月ごとに行うようにして、もし派遣先と合わないなどあるときは、別の派遣先に変えるなど対応している。

所有している資格や免許で手当をつけたり、子ども・子育て拠出金を出すなど、派遣スタッフが働きやすい待遇をしている。

・運営費

1/2 が派遣料金収入費、1/2 が国、市町村による助成。交通費は、派遣先が負担。

松場氏自身は、この事業協同組合から給料をもらわざともやっていけるが、次に引きつぐことを考え、代表の給料もしっかり出るような事業計画、運営方法をとっていた。

○事業のメリット

・派遣スタッフ

1 年に 2 か所以上の場所で勤務することや、労働時間も希望を伝えられるため、自分に合った働き方、自分の適性を活かした仕事に就くことができる。

・利用する事業者

組合の出資金が必要となるが、利用料金（時給と交通費）を負担することで必要な人材を確保できる。社会保険料などは、共同事業組合が負担。

・運営事務局

文化と伝統を引き継ぐ担い手を確保できる。派遣スタッフが、この町で元気で楽しく、ワクワクしながら暮らし、成長を応援することがやりがい。

○スタッフの退職動向

個人によって差はあるが、最短で半年、最長で2年の間に事業者とマッチングし、組合を退職している。

組合で勤務したスタッフ全員が定住するとは思っていないが、3割くらいが定住してもらえればOKという考えだった。

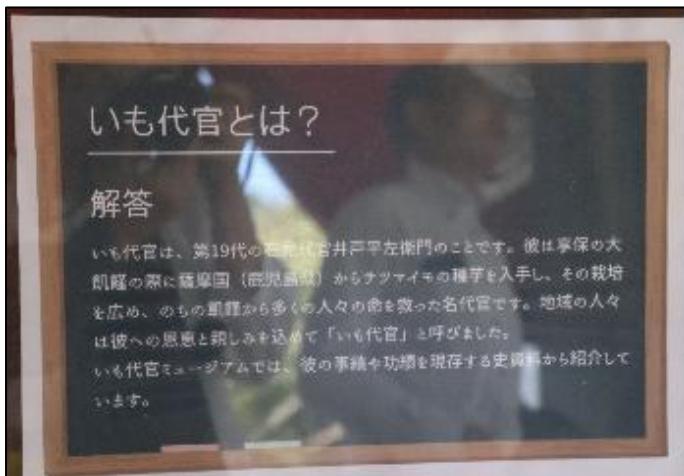
○ 派遣先

観光関連の事業者、宿泊施設、企画会社、飲食店など現在は17社ほどが加入している。

○ 井戸神社社務所が組合事務所の理由

井戸神社は、第19代代官井戸平左衛門の功績をたたえて建立された。井戸平左衛門は、石見銀山を有する石見国大森を代官として享保16年（1731年）に任命された。西日本一帯はウンカという害虫のためひどい飢饉に見舞われていた。一刻を争うと幕命を待たず年貢米を開放、年貢の減免、さらには薩摩藩のサツマイモの苗を入手するなど領民救済のために数々の施策を断行した。

その神社を管理する人がいないため、事務所として借り、建物の管理をしている。



町内には、井戸平左衛門の資料館もある



勝海舟による揮毫

○ ワクワクを大事に将来を考える

今後大森町の人口の推移を考え、年代のばらつきも気にしながら、必要な人材を確保していきたいと考えている。源流となるモノづくりを抑えることがカギ。



視察説明の様子

～視察を終えて～

前日の美郷町安田氏と同じく、惜しみなくノウハウを共有していただいた。大森町への愛着、行政に頼らず自ら動いてまちづくりをしていく姿勢に頭が下がる思いだった。そのまちづくりをワクワクやドキドキも忘れず、そして次の世代へ引き継いでいくことなど幅広い視点から考え、その手段の一つとして特定地域づくり事業協同組合を上手に利用していることを実感した。また、説明を受けている間に遊佐に行ったことがあるという方が挨拶に来てくださった。現在は、大森町でパン屋さんを経営しているそうだ。自ら動いて、楽しそうにしている人の周りには、同じように自ら動き楽しむ人が集まつてくる傾向があるのかもしれない。

(3) 島根県大田市 石見銀山を資源とした産業と教育の取り組みについて

視察日時 7年10月7日（火） 8：30～9：45 13：30～15：30

場所 大田市大森町 町並み保存地区、世界遺産センター、大田市役所

説明者 大田市教育委員会 教育部 石見銀山課 課長 中尾 裕之氏

課長補佐 中田 健一氏

産業振興部 産業振興課 課長 梶尾 実氏

□大田市概要

大田市は、島根県の東西の中央部に位置し、日本海に面する。面積は、435.34 km²。松江市からは、約70km、浜田市からは約65 km。北部は、日本海に面しているが、急峻な中国山地が海岸に迫っているため、山林原野が多く、平坦地が少ない。

平成 17 年に旧温泉津町と旧仁摩町と合併して新「大田市」となっている。世界遺産登録となった石見銀山や温泉地、三瓶山など見所は多い。



大田市の位置（大田市観光サイトより）



石見銀山世界遺産センター

*石見銀山を資源とした産業と教育の取り組みについて

(1) 概要

大田市中央部にある石見銀山遺跡は、平成 19 年 7 月 2 日に日本では 14 番目、鉱山・産業遺構としては初の世界遺産登録となった。石見銀山は、1527 年に本格的な開発が開始され、1533 年には大陸から銀精錬法の灰吹法を国内でいち早く導入し、日本を「銀の島」と呼ぶほどの世界的な産銀国に導いた。石見銀山の銀と南米の銀が 16 世紀ごろの世界経済を一体化させる大きな役割を果たしていく、歴史的価値は大きい。大森町の自主的な取り組みと世界遺産という資源を活かし、観光振興に力を入れている。2 年後は、ユネスコの世界遺産登録から 20 周年、石見銀山が発見されてから 500 周年にあたる都市のため、今から気運を盛り上げる取り組みをしている。



焼津市議会会派の皆様と合同で研修



視察説明の様子

(2) 観察説明から

○観光振興に取り組む理由

観光は、裾野の広い総合産業と言われており、旅館やホテル、飲食店だけでなく、運輸業、農業、水産業、農水産品加工業など様々な産業へ広く波及し、地域経済による循環を作り出す効果があるため。

○重点エリアを設定して取り組む

観光地域づくりを進めるために石見銀山を含む大森エリアの他に、三瓶山のある三瓶エリアと、海に面して温泉のある温泉津エリア合わせて 3 つの重点エリアとして取り組んでいる。この 3 つのエリアで情報共有をして連携している。大森エリア、温泉津エリアではすでに民間の事業者が力を入れて取り組んでいるので、民間が主体となり、行政はバックアップをする形をとっている。

働き手が不足しているので、午前中に観察した事業協同組合からの人材派遣が行われている。

○太田市の観光客は多くはない

6 年度の観光客延べ数は、130 万人ほどで、現在の観光消費額は、32.1 億円。それを、50 億円まで引き上げることが目標となっている。

○観光客が増えない課題

・いかに足を伸ばしてもらえるか

世界遺産登録の翌年は、81 万人ほどの観光客が訪れたが、6 年度は 27 万人ほどに落ち込んでいる。島根県の観光地は、松江と出雲がメインで、どのようにして大田市まで足を伸ばしてもらうかが課題。

・魅力をいかに伝えるか

歴史的価値が大きいが、それをいかにわかりやすく伝えるかが課題となっている。

・インバウンドへの取り組み

浜田市の港へクルーズ船が来るので、大田市に来て泊ってお金を落としてもらいたいと考えている。これには、県の支援も欠かせない。ただ、世界遺産登録時に、かなりの観光客が来てオーバーツーリズムを経験しているため、適切な人数に抑えることも課題。

・遊ぶ広報の利用

暮らすように 13 泊 14 日を大田市で滞在して、現地ガイドのツアーに参加するなどし、大田市の魅力と感じたところを情報発信すると、7 万円の補助が出る制度。年々利

用者が増えているので、この制度も利用して、交流人口を拡大していきたい。

○産業振興

世界遺産登録後は、大森町に土産物店が増えたが、冬には観光客が減るため、長続きする店が少なかった。石見銀山世界遺産センターで15人ほどの雇用を確保している。

○小中学校教育への取り入れ

大田市の小中学校は、高学年になると石見銀山の学習をすることになっていて、それぞれの学校でテーマを決め、取り組んでいる。ちょうど私たちが石見銀山世界遺産センターを訪れているときも、複式学級と思われる子どもたちがスタッフから銀をどのように採掘するかの説明を詳しく受けていた。



世界遺産センターの展示の様子

～視察を終えて～

世界遺産というブランドがあっても、観光客の誘致に苦労する部分があることを認識した。世界遺産センターは、とても詳しく銀山のことを説明しており、石見銀山の当時の様子や価値を理解するにはとても有効に感じた。

遊佐町も縄文時代の小山崎遺跡のビジターセンターを今後作るので、規模はかなわないが参考にできる部分があるのではないかと考える。やはり大田市でも石見銀山について小中学校で学ぶ機会があるとのことで、遊佐町でも小山崎遺跡についてもさらに学んでいく必要があると感じた。